

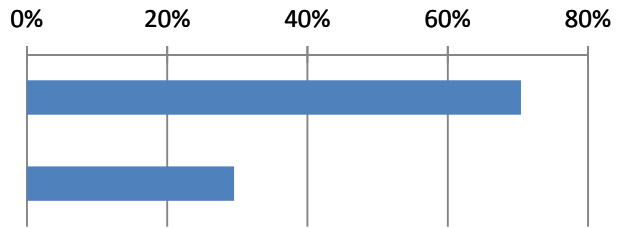
# 看護学分野における授業での情報活用能力育成の取り組みについて

## 1. 回答率 16%

依頼教員数	280	(名)
回答教員数	44	

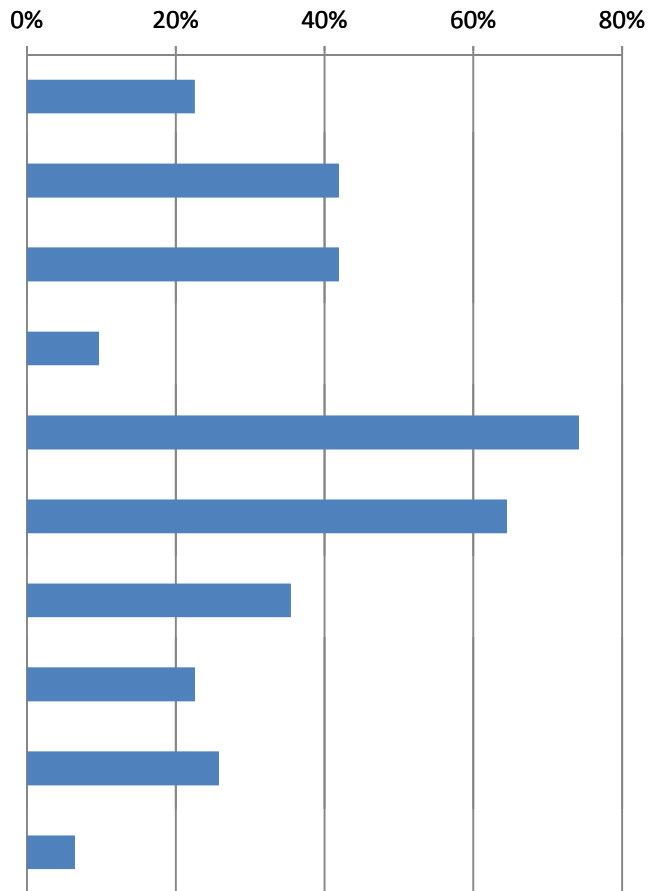
## 2. 情報教育育成への取り組みの割合

項目	人数	割合
実施している教員	31	70%
実施していない教員	13	30%



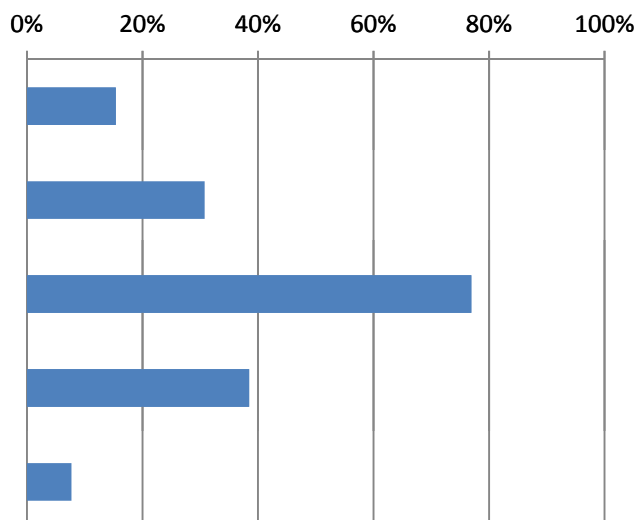
## 3. 情報活用能力育成への取り組み状況

項目	人数	割合
コンピュータやネットワーク、アプリケーションソフトを適切に利用できる	7	23%
情報管理の原則（情報公開、プライバシー保護、取り扱い倫理、セキュリティ）を説明できる	13	42%
医療で扱う診療および看護記録の種類・特徴・要件を説明できる	13	42%
電子化された診療情報の作成過程と管理の概要を情報システムの観点から説明できる	3	10%
看護上の問題点を解決するために必要な医療・看護の情報源を選択し、具体的な情報を検索・収集し、整理できる	23	74%
看護事例の取り扱いに関する個人情報保護、守秘義務の考え方に照らして正しい情報収集と整理ができたか判断できる	20	65%
研究論文のクリティークやEBMの重要性に照らして問題を分析的・批判的に捉えることができる	11	35%
収集した情報を、ソフトウェアを用いて目的に応じた形に加工できる	7	23%
対象の情報提供ニーズ充足のための資料を作成できる	8	26%
ICTを活用して作成した情報を提供及び交流できる	2	6%



## 4. 情報活用能力育成を実施していない理由

項目	人数	割合
初年次・キャリア教育で実施	2	15%
授業を進める上で情報活用能力を意識する必要がない	4	31%
授業で教える時間がない	10	77%
学習の支援体制が不足	5	38%
情報活用能力を指導する力が不足	1	8%

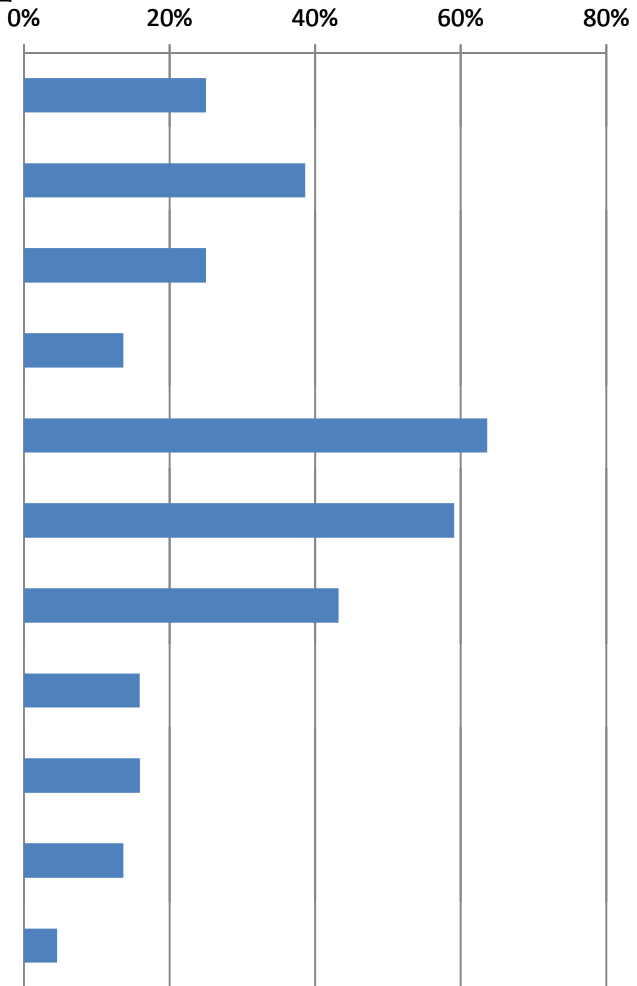


その他（機材が不足、講義計画入れなかった、臨地実習で指導、他の専門科目で実施、学生数が多い）	5	38%
--	---	-----



### 5. 今後取り組まなければならないと考えている教育内容

項目	人数	割合
コンピュータやネットワーク、アプリケーションソフトを適切に利用できる	11	25%
情報管理の原則（情報公開、プライバシー保護、取り扱い倫理、セキュリティ）を説明できる	17	39%
医療で扱う診療および看護記録の種類・特徴・要件を説明できる	11	25%
電子化された診療情報の作成過程と管理の概要を情報システムの観点から説明できる	6	14%
看護上の問題点を解決するために必要な医療・看護の情報源を選択し、具体的な情報を検索・収集し、整理できる	28	64%
看護事例の取り扱いに関する個人情報保護、守秘義務の考え方に照らして正しい情報収集と整理ができたか判断できる	26	59%
研究論文のクリティークやEBMの重要性に照らして問題を分析的・批判的に捉えることができる	19	43%
収集した情報を、ソフトウェアを用いて目的に応じた形に加工できる	7	16%
対象の情報提供ニーズ充足のための資料を作成できる	7	16%
ICTを活用して作成した情報を提供及び交流できる	6	14%
その他（問題発見能力、リテラシー）	2	5%



### 6. 教育内容の例(教員個人の対応状況)

健康に関する情報や、話題になっている健康法などを、複数のメディアから情報を得て、比較検討しながら分析するという課題を提示し、レポート提出してもらっている。各メディアの特徴や、医療情報の根拠を正しく判断し、利用者に提供していく責務があることを理解することにつながっていると考えられる。講義の中でも、健康情報の読み取り方を新聞記事、文献等で示しながら解説、ドキュメンタリーやTVの特集など多様な教材を使って、情報の「見せ方」について学べるように構成している。
看護過程の展開時に文献レビューを行う。図書の検索方法を教示している。看護の問題点の分析やケアの立案などに効果がみられる。
看護過程の展開に関する講義の中で、情報収集に関する内容を講義している。
手術事例を用いて、看護過程演習を行う。その中で個人情報の取扱いや電子カルテ情報が看護上でどのような情報となっているか、情報整理の上で識別できるように取り組んでいる。効果として、領域別実習(成人看護 急性期看護 慢性期看護)での思考過程と記録がこの授業をベースに行われている。
産褥期の母子の事例展開の際に、必要なケアを抽出する際に、テキスト(教科書)だけではなく、必ずWeb版の医学中央雑誌、GiNiiで「文権検索」をして、実際に病棟で実施されているケアにはどのようなものがあるのかを確認させます。(グループワーク)その後、その論文に記載されている内容が「妥当」なものとして導入可能であるかについて解説しています。(論文のクリティーク)
演習事例(ペーパーシミュレーション)を用いて、個人情報をもどのように保護して、事例を紹介しているか、また発達段階から生活背景から日常生活がどのような健康障害が影響して阻害され生活上の困難をきたしているかポートフォリオ形式で、資料収集からグループでのディスカッションをとおして理解させている。実際この演習を終えた学生は、実習中も学習成果を参考に看護過程を展開しているようである。
実習記録上の個人情報の取り扱い。記録のチェックと指導。事例を用いた場合やプロセスレコードを作成時。

<p>看護研究指導では、学生が抱える看護への疑問・問題について自分なりに文献検索してもらい、それを持ち寄ってプレゼンやディスカッションをします。内容によっては、ネットの情報をそのまま持参する学生もいますが、その際に情報の選別の重要性や倫理的視点を説明します。また、学生間で文献をクリティークする際には、科学的視点に合わせて批判的に考えられるよう疑問を投げかけるようにしています。指導の基本は「学生の経験から導く」ことです。経験していないことは、これまでの経験や学習をもとに考えるよう導きます。「誰かが言っていた」ことより、「自分で考える」「意見が言える」ことが学生の自信に繋がるようです。</p>
<p>事例を用いて、evidence based practice の方法を教授しています。教員が事例をもとに、データベースを選び、キーワードを決めて、文献を選ぶ過程を教授しています。</p>
<p>実習、卒業研究のことも踏まえ、個人情報保護、守秘義務など、倫理上の問題について、講義で触れている。しかし、教科書の内容であったり、過去の経験の事例だったりするので、より理解されたとは言えない。</p>
<p>初年次のスタディスキルでは、情報の適切な利用方法の演習や管理の原則について講義・実習では、看護に必要な情報収集、個人情報の管理、対象への必要な情報提供の能力育成等についての学習と実践看護研究では、クリティーク～収集した情報の加工の能力を身につけるなど、担当している科目において実践できる内容は出来る限り実施している</p>
<p>臨地実習の現場で実際の患者さんを通して学ばせている。</p>
<p>臨地実習科目では、情報収集および情報の管理については、個人情報保護法から大学で定められた個人情報取り扱いの規定ならびに倫理的な配慮について説明するだけでなく、実習要綱にも記載し、日々の実習指導場面で活用しています。特に、本学が主として実習に用いている施設は、医療施設による個人情報保護だけでなく、母体が通信関連企業であり、情報に関する規定が厳しい現場です。インシデント発生予防に向けて、学生が行動する手順まで1つ1つ説明し、徹底しています。特に、不必要な情報を収集することのないように(学生は電子カルテを隅々まで記載したいという気持ちが強い)具体的な指導を心がけています。</p>
<p>授業の中ではなく、学生個々に対してPCを用いたり、実際の電子カルテや看護過程の展開の中で、教授している。</p>
<p>フレッシュセミナー1(学生としての学び方などの内容)において、情報を正しく収集し、レポートが書けるように、図書館の文献検索(opac)方法を教える。個人情報の保護や不適切な文献引用がないように情報倫理のDVDの視聴を入れている。</p>
<p>看護技術教育の科目の中で、自作の技術教材コンテンツをWeb上に公開し(アクセス制限あり)、技術習得の向上を図っている。その中で、教材の著作権の保護や不正アクセス等への注意喚起を実施している。情報活用に関する教育効果としては、事前学習としてWeb教材を活用するため、演習時間内にデモンストレーションを省略することができ、技術習得に向けた効果的な演習展開ができた。しかし、一方では、Web活用による学習の限界もあり、今後の課題となっている。</p>
<p>子どもの事故などサイト上の教材を使い見せて具体的な子どもの動きのイメージ化を図っている。事故をきたしやすい場所を携帯で撮影し、写メする課題を出している。</p>
<p>実習で情報源とするデータの種類や特徴を概説しているが、時間数の関係で概要説明のみとなっている。</p>
<p>大学における学びを主体的に取り組むために、IBL(アクションラーニング)の中で、事例を提供し、課題を解決していく過程で情報収集、情報整理、要約、伝達を学べるように仕掛けを作っている。いわゆる、スタディスキルズを使用した授業を展開している。また、実習に際しては、クラウド型eラーニングによる看護技術教材を提供している。これには、解剖生理など自己学習できるコンテンツを入れ、国家試験に関する自己学習ツールとしても利用可能にしている。特に、ICTにより独学を支援するための教材開発を試行錯誤しながら進めている最中である。</p>
<p>目的に応じた情報の選択と収集、活用方法(分析力含む)、そして、これらの適切性、妥当性、信頼性を判断できる能力の育成。</p>
<p>印刷物を作成し配布。パワーポイントを時々使用。</p>
<p>紙上事例では想起できないと思われる患者の身体状況をDVD等の視聴を通じてイメージ化できるように工夫している。</p>
<p>授業とは少し異なるかもしれませんが、看護学の実習において、病院では患者診療記録は電子カルテ化されているので、現場の学習で最も情報活用や守秘義務、個人情報保護についての判断・注意を、学生は学んでいると思います。(実習グループごとに(少人数で)現場で実際に学んでいると思います)</p>
<p>実習記録上に個人の特定されるような情報は記載しないよう指導しています。</p>
<p>情報の活用の仕方までなかなか教授する時間とはとれません。(疾患と看護の方法を教授するのがメインの科目なので)ただし、自己学習をするにあたり、推奨したいサイト、厚生労働省や各疾患の支援団体のサイト等を紹介するようにしています。</p>
<p>病院の電子カルテの開発に携わった講師を招へいし、電子カルテの記載例を提示しながら、医療チーム内で有効に情報を共有したり活用したりするために、電子カルテがどのように構築されているのかを理解させる。電子カルテ上の情報を二次的に利用することにより、看護職がどれだけの仕事をしているのかについて、他職種が理解可能な形で説明できることを理解させる。</p>

## 7. 大学として必要な課題への意見

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講義の目的が情報活用能力に関するものでないものも多く、学生が各論を学ぶ前の低学年で、医療情報の取り扱いについての学習の機会がほしい。看護倫理での扱いの明確化。</li> <li>・ 授業の演習として、電子カルテのデモ版を使用できるようにする</li> <li>・ 情報活用能力を向上させるために、通信設備や機器は年々充実してきており、FD活動も行われているが、臨床実習を担当する看護系教員が教材作成に取り組む時間は非常に少なく、構想はあっても時間の不足により実現していないことが多い。全体的に教育と情報技術に携わる人員を増やすことと、領域の枠を超えたプロジェクトチームを作り、研究等の活動を継続的に行っていく必要がある。</li> <li>・ 情報活用能力を組み込んだ講義の準備をするための時間確保。演習を実施する際のマンパワーの確保</li> <li>・ 情報活用能力の明確化</li> <li>・ 教員の教育向上を図ることが必要と考えます。できるだけ多くの教員が参加できるように、研修体制を整えたいと思います。</li> </ul>
---

- ・ 文字で表されたデータ(数値)などは比較的、情報整理や思考に反映しやすいが、映像などから(視覚データ)気づく能力や、推理する能力は、近年低下しているように思われる。課題としては、事例提供段階で紙上という情報提供と映像という視覚データから「人」を統合して解釈・分析などできる能力の教材作成やプログラムの開発が必要である。
- ・ 学生が自由に使用できるPCを増やす必要がある(インフラ)。情報はとれたけど、その情報(文献)が読めない！ということがあ  
る。日本語を理解する能力が必要であると思う。
- ・ 教育・学習支援者の確保が必要
- ・ 教育・学習支援者などのマンパワーの充足
- ・ 教員自身の研鑽
- ・ 看護学科そのものが情報活用能力の必要性を感じるが必要と思われます。
- ・ 教育・学習支援者の確保、学内における情報システムを活用した学習支援の確立
- ・ 看護教員はあまりICTの教育をうけていないので、まず、教員の研修などが必要であるとおもいます。
- ・ 1年次に情報処理に関して学んでいるが、いざ卒研となるとリセットされている。何をどれくらい習得されているのか、明らかにし、支援体制が必要。教員自身の教育力向上のための研修体制と研修に行ける体制が必要であるとする。
- ・ 各科目間での教授内容の共有化による、内容の充実
- ・ 環境面での支援体制が必要である。
- ・ 大学としての情報活用能力向上に向けた支援体制の構築(教員が活用したいと考えた場合に、支援体制が不十分であるため)
- ・ 大学の情報活用に対する環境が整備されていない状況もあるので、その点を充足していくことと情報を活用する際の留意点を踏まえて授業で活用すること
- ・ 情報過多の背景の中で、以下に必要な情報を選択し、そこから問題点を導き出すこと。その問題を解決するための介入による情報の変化を評価できる能力を養うこと
- ・ 学士教育においては、将来も持続できる情報活用能力を育成することが必要であると思う。その基盤としては、スタディスキルズを身につけ、4年間でスキルを活用しながら獲得していく仕組みが必要である。また、大学生が主体的に学ぶ在り様を目指すためには、授業の時間以外の時間を有効に使用できるよう、独学を支援するしくみを持つことが必要と思う。教員は、上記2点の授業設計能力を養うことが求められると思う。また、情報活用の結果として、どのように評価するか、学生が適切に自己評価できる力を伸ばせるよう、教員も教育評価について研鑽することが必要だと思う。
- ・ 教員の教育力向上のための取り組み、教育・学習支援者の確保と活用
- ・ 学士力で情報活用能力の位置づけの明確化
- ・ 電子カルテに対応した患者情報活用能力の位置づけの明確化、情報活用の能力育成への取り組み
- ・ 学生人数に対応した適切な教員数の配置。初年度教育の充実
- ・ 学生は、パソコンやSNWを使用することを大学入学前から行っている学生もおり、ネットから時用法活用することにわりと違和感なく日常化している。ただ、それによってどのようなリスク(情報漏洩や個人情報保護違反、著作権侵害など)に関する判断ができていないため、法的にも問題も生じやすいと考える。情報活用に対するルールや規範についても、具体的にしっかりと教育していく方がよいと考える。
- ・ 教育・学習支援者の確保